

2022年6月16日作成

2022年7月17日改訂（改訂箇所を斜体で記載）

西島 勉

初めておもちゃ絵の文化的価値を見出し体系的に分類した権田保之助

*ポイントにアンダーラインを付し、**気になる記載を赤字**とした。

[概要]

おもちゃ絵（子ども向けの浮世絵）は使って捨てられてしまう安価な子供の玩具だとして文化的価値が見出されなかった大正初期において、権田保之助はおもちゃ絵に興味を覚えて研究し、体系的に分類するとともにおもちゃ絵に文化的価値を見出し、日本最初の浮世絵研究誌「浮世絵」に大正4年7月から5回に亘って「文明問題としての玩具絵（おもちゃ絵）の研究」と題する論文を投稿している。

また、自らおもちゃ絵を収集し、大正7年2月には白木屋呉服店での「おもちゃ絵の展览会」におもちゃ絵を出品している。

権田保之助はおもちゃ絵をどういう観点で体系化して分類したのか、どこに文化的価値を見出したのかなど、調査したので報告する。

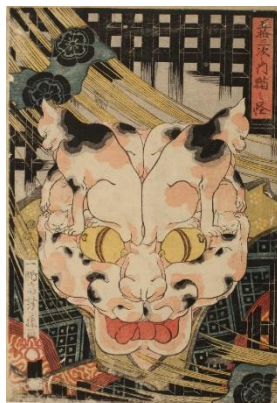
1. おもちゃ絵について

おもちゃ絵は子どもの手遊びのために描かれた手刷り木版画のことで、それらは庶民の子どもたちにとっての玩具であり、絵本であり、また教科書でもあった。

おもちゃ絵が描かれるようになったのは明和初期（1764～72）からで、子どもの好む題材が選ばれるようになり、羽子板絵や武者絵、あるいは動植物を擬人化した戯画風のもの、さらに子どもの健康を守る疱瘡除けの赤絵、また教訓絵や細工絵などとジャンルが広がっていった。切り抜いて小箱に貼ったり、組立て絵に仕上げたり、立版古に細工したりして手遊びの玩具として楽しまれた。また絵がそのまま玩具となるような、福笑い、双六、判じ絵、影絵など、多種多様な遊びのバリエーションによるものも誕生した。

（おもちゃ絵の例）

（擬人絵）



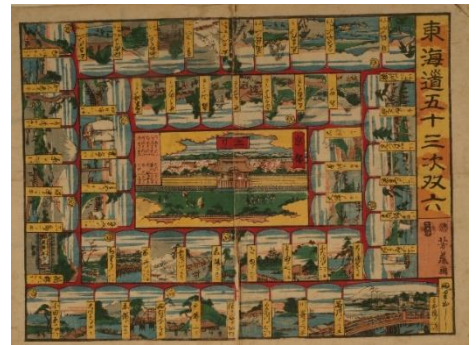
（疱瘡絵）



(組立絵)



(双六)



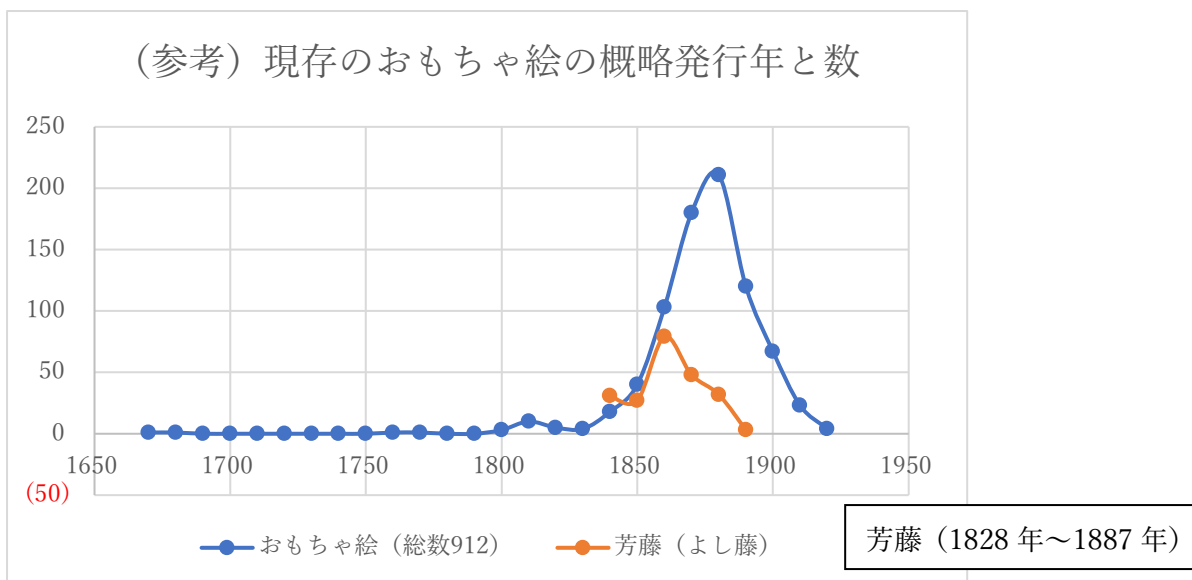
(判じ絵)



(影絵)



東海道五十三次の地名を絵で表現しています。どこの地名か分かりますか？
 (ヒント) 例えば右上は、頭のない魚と竹の皮で「かな・かわ (神奈川)」



「酒井好古堂 HP 浮世絵学」掲載データを加工して西島が作成したグラフ

<http://www.ukiyo-e.co.jp/40565/2022/05/>

「おもちゃ絵」は、女子供の遊びとして毎日のように使われて、いつの間にか消耗されてしまった。そのため、夏の売り出しの団扇 (うちわ) 絵と同様、殆ど残っていない。

(酒井好古堂 HP より)

2. 日本最初の浮世絵研究誌「浮世絵」の創刊

「浮世絵」は二代目酒井好古堂店主の酒井庄吉氏が 1915 年 (大正 4 年) 6 月から 1920 年 (大正 9 年) 9 月までの 6 年間で 55 号発行した日本最初の浮世絵研究誌です。

小島烏水、坪内逍遙、宮武外骨、三田村鳶魚、石井研堂、桑原羊次郎、星野朝陽、漆山天童、大槻如電、林若樹、内藤鳴雪、淡島寒月、朝倉無聲、岡野知十、武岡豊太、野崎



左文、関根黙庵、油井夫山、山中共古、山下詳光、井上和雄、藤懸静也、橋口五葉、相見香雨、島田筑波、永井荷風ほか錚々たる当時の文人、研究者が執筆陣で、多くの人々の注目を集め絶賛を博しました。今は、浮世絵研究者にとって貴重な資料となっております。

(酒井好古堂 HP より)

権田保之助は「浮世絵」第 2 号から玩具絵 (おもちゃ絵) に関する論文を投稿しており、第 4 号において玩具絵を体系的に分類している。玩具絵に関する論文は、権田保之助以外に第 5 号と第 14 号に松村翠山が、第 19 号に若尾悍馬が手遊絵 (おもちゃ絵) として投稿している。若尾悍馬は第 19 号において手遊絵を分類して例示している。

3. おもちゃ絵に関する権田保之助のかかわり

●1913年（T2）頃から「おもちゃ絵」を収集し始める。

- ・これからお話致そうと思う「おもちゃ絵」の話は、私が5、6年前から自分の趣味として、集め始めたものについて、これに何等かの意味をつけたいという考えから急にやりだしたもので、特別の方針、主義、目的のもとに集めてその結果を発表するというものではありません。（大正8年3月1日発行の「幼児教育」（日本幼稚園協会）掲載の「日本幼稚園協会2月常会の講話」より）

●1915年（T4年7月）浮世絵研究誌「浮世絵第2号」へ論文掲載

「文明問題としての玩具絵の研究（一）」

- ・権田保之助がおもちゃ絵に対して興味を覚え注意を向けるようになったのは、T4年5月9日の夜神田元岩井町の玩具問屋伊勢辰さんの許で菅原君（菅原教造）と一所に玩具絵の収集を見せていただいたのがそもそものはじめ。それから一週間ばかりたって好古堂でかなりよく集まった玩具絵を調べて分類し、ようやく物に成りかけた。
- ・玩具絵の定義を「子供を享樂の主体の中心とする版画なり」とした。
- ・玩具と文明について論じている。

（西島注）以下、「おもちゃ絵 江戸庶民のエスプリとデザイン」（飯沢匡、広瀬辰五郎著、徳間書店刊）より抜粋。

おもちゃ絵の版元「いせ辰」の三代目は明治15年（1882年）あたりから、しるこ代を貯めておもちゃ絵を買い集めていたと後年述懐しているから、「浮世絵」創刊号を大正4年6月15日に発刊した版元の酒井好古堂が三代目「いせ辰」の収集を承知していて権田氏を紹介したと想像される。

●1915年（T4年8月）浮世絵研究誌「浮世絵第3号」へ論文掲載

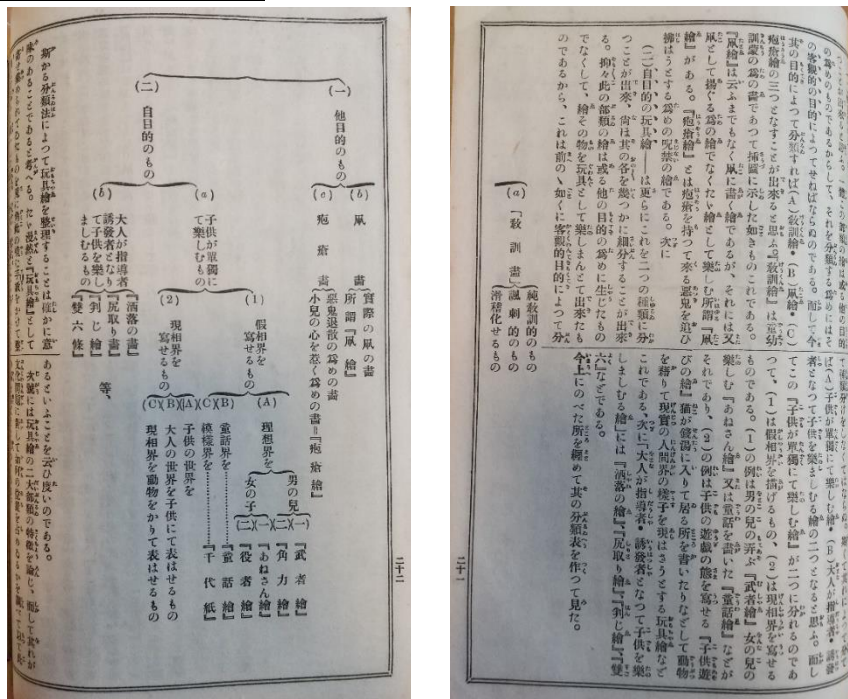
文明問題としての玩具絵の研究（二）

- ・玩具絵が江戸時代に盛んであった所以は他でもない。それは時代が封鎖的都市経験の時代であって、経済がなお未だ家を離れず、手工業が最も枢要なる工業経営形式となっていた結果は生活が到底家内の室内的たらざるを得ぬものである。しかしてこの室内的生活における玩具としては絵としての玩具の右に出るものはない。玩具絵が江戸時代に枢要の地位を占めていたことは決して偶然ではないと云わなくてはならぬ。然るに時代は変わって明治となった。もっとも明治となっても其の始め20年間位はなお生活は江戸時代の継続であった。従って玩具絵はなお余喘を保ちつつあったのであるけれども、日清戦争によって資本主義の第一波が日本の岸を襲い、次いで日露戦争によって国民経済の基礎が確立し、生活は戸外的となり公開的となって玩具絵は其の宿るべき家を失い、器具としての玩具が戸外を飛び回り、空を翔るようになった。かくて玩具絵は江戸の文化を終始したのである。

●1915年（T4年9月）浮世絵研究誌「浮世絵第4号」へ論文掲載

文明問題としての玩具絵の研究（三）

- ・「他目的の玩具絵」と「自目的の玩具絵」はそれ程厳密な区別が付け得られるものではないのである。それには何れにも付かぬ中間物があって、考えようによっては他目的のものともなり、自目的のものともなるものがある。中間物や過度現象があって分類に困難を来すはただに此の玩具絵のみかは、人間一切の現象皆その選に漏れないのではあるまいか。
- ・玩具絵を体系的に分類。



●1915年（T4年10月）浮世絵研究誌「浮世絵第5号」へ論文掲載

文明問題としての玩具絵の研究（四）

- ・他目的の玩具絵は其の当初の成立動機によって必然的に子供に対しては対立的のものとなって来なくてはならぬ。即ち其れは一段高い所から子供を指導するとか、他の優れた世界から凡てに劣った子供の世界を教化するとか、或る他の実際目的に子供を向けるとかいう風で、いつでも子供と相対立している。
- ・自目的の玩具絵は矢張り其の成立の動機によって子供に対して融合的のものとならざるを得ない。即ち其れは一段高い所から子供を指導し教訓するというのではなくして、子供と同じ列に立ち、子供の生活に伍して行こうとするものであるから何処までも子供と一所になろう子供と結び付こうとしている。言い換えれば其の絵の表す世界は子供の世界もしくは其の継続又は延長なのである。

●1915年（T4年11月）浮世絵研究誌「浮世絵第6号」へ論文掲載

文明問題としての玩具絵の研究（五）

・玩具絵の各種目に於いて私達は如何なる文化の側面を表すものであろうか。

第一に所謂「他目的の玩具絵」は如何。

「教訓画」を借りて行った其の時代の教育の方法及び趨勢を知り、併せて其れに淵源した時代の知的生活及び情意生活を窺うの一端を得ることが出来るであろう。

「凧の画」及び「凧絵」に現れていることによって其の時代の人々の心を動かした理想を知り得ようし、「疱瘡画」なるものを何故に生ずるに至りしか、疱瘡のまじないとして何故殊更に絵画を取るに至りしかをとふ点に時代の迷信と共に時代の絵画の位置を知る糸口を発見することが出来はしまいか。

次にこの「教訓画」にせよ「凧絵」にせよ又「疱瘡画」にせよそれらが漸次其の最初の厳肅なる目的より脱化し行いて益々自目的のものと化し行き滑稽化され享樂化され行く其の変遷の間に其の動因となれる時代の思潮、時代の傾向を察することが出来はしなからうか。

第二に所謂「自目的の玩具絵」はどうであらうか。

「子供のみの遊ぶ自目的の玩具絵」なるものによって我々は其の時代の生活の縮画を見ることが出来るのである。男の子の遊ぶ画によって時代生活の外的側面を窺い、女の子の戯む画を通して時代生活の内的側面を知ることが出来るとは既に述べた所であるが、そのみならず男の子が喜ぶ「武者絵」「相撲絵」によってその時代の男性の理想を推察し得るが如く、女の子が楽しむ「あねさん絵」「役者絵」によって其の時代の女性の理想を断ずる事が出来ると思う。

次に「大人が指導者となりて子供の遊ぶ自目的の玩具絵」なるものによって我々は其の時代の家内遊戯法を知ることが出来、ひいては家庭生活の有様を推察し更に家族組織及び当時の社会組織をさえ推論し出すことが出来るものである。殊に此の玩具絵の盛んであった時代がかの封鎖的都市経済の時代、警察国家の時代であったということを考えてくると此の種の玩具絵の研究が少なからぬ意味を有してあるということを知るに難くはないであろう。

なお進んで此の玩具絵は全体を大観し来たり、ある時代には其のある種のもものが盛んに行なわれしが、次の時代には如何に推移し、なお其の次の時代には如何に変遷し行きたるかを見て、其の進化の奥に潜む文化進展の跡を尋ねることも亦忘れてならぬ大問題であると思う。それらのことが大成された時には、玩具絵の文明的研究は其の完結を見得たと云い得るのである。しかし到底容易なる問題ではない。

私は以上でもって玩具絵が文明問題として如何の意義と重要さとを有しているかを述べ、将来私の此の方面における研究の筋書をざっと書き並べて見たに過ぎないのであった。此れを足場として初めて渾然たる玩具絵の研究の大成するのは此れを将来に期しようと思う。（完）

(西島注) 現存するおもちゃ絵は少なく、未だにおもちゃ絵の全貌を掴めていない。
権田保之助が将来に期したことについて、未だ誰も大成せず。

●1915年 (T4年12月) 浮世絵研究誌「浮世絵第7号」へ論文掲載

三都の新浮世絵

- ・東京の浮世絵師は近い過去の江戸という時代—浮世絵を渾熟せしめ「浮世」という気分を爛熟せしめた江戸という時代になお餘りに多くの憧れを懐いて居るものと見えまして彼らが筆にする絵は大多数が其の時代の生活内容を現すことに努めて居るように思われます。

今は古い時代の錦絵を引き伸ばして屏風や懸物に描いているべき時代ではないと思います。新しい生活に徹した芸術家が動きつつある現在の浮世味を一管の彩筆を通じて遡り出さしめなくてはならぬ時であると信じます。浮世絵が現代に復活する道はといいますと、私はこれだと思わずには居られません。

●1916年 (T5年2月) 浮世絵研究誌「浮世絵第9号」へ論文掲載

玩具絵の趣味 (上)

- ・十数年以前にあっては、心ある2,3の人々を除いては、殆ど其の存在の価値を認めずしてあった浮世絵が今日にては社会の広い範囲に愛玩珍重せられるに至り、古木再び春に会する盛運を見るに至ったことは誠に興味ある現象と云わなくてはならぬ。
浮世絵が斯く一般的社会の興味をそそりつつある今日に於いて、其の一分子なるわが玩具絵が斯くの如く甚だしく過少視され、否な殆ど全く其の存在の如何をすらも忘れられつつあるという其の事である。

- ・私はここに児童の心理を解剖して其れが知情意の三方面に如何なる現れを示すかを細論するいとまなきを告白する。児童の心の働き方を其の知的側面に於いて「直観的」、其の情意的側面に於いて「原始的」もしくは「素朴的」、心全体の活動の側面に於いて「空想的」と見んと欲する。

空想世界の主人公たる子供の為の玩具絵には、あらゆる物に精神がある。そして主人公の為に凡ての物が躍然として生命の諧音を高唱している。これが芸術の表現に影響してその題材は奇想天外となる、其の構図は自然法の破壊となる、その色も、その線も小さな世界の制約を超脱している。而して凡てを超えて生命が高鳴っている。玩具絵の趣味は此処に至って遂に其の最高点に達するものである。斯くの如き絶大な趣味を我々に与えるものわが玩具絵を除いて果たしてよく何物があるであろうか。(未完)

●1916年 (T5年6月) 書画骨董雑誌へ「玩具絵の話」を投稿

- ・玩具絵は安政前後から盛んになったようである。もっと古くから玩具絵らしいものはあったけれども、安政頃から明治維新までは非常に発達して、其の種類も多くなり亦表現の方

法も進んでいた。そして明治に入ってから、他の版画が凋落したと同時に、漸く衰退の気運に向かったが、玩具絵は他の版画とは社会的地位を異にしていた。即ち他の古い版画に対する時代の好尚が漸次変遷して来て、玩具絵と云うようなものが出来るという時の関係から見ても、他の版画より生き伸びられる力があつた。玩具絵の大天才とも云い得る芳藤がいた。そして明治10年前後を境として、自由にその天分を發揮していたので、一には時代の関係から、二には人の関係から、他の版画に比べて玩具絵だけは相当に見られるものがあつた。しかし印刷物の変遷、推移、絵の具の粗悪になつたのが原因して、流石の芳藤も此の大勢を挽回することが出来ず、明治10年位を最後として滅亡してしまつた。何と云つても芳藤が一番偉い。他の筆者等が子供の享樂を忘れて、大人が鑑賞して味ふべきものを描く傾向が有るにも係らず、芳藤(よし藤)は常に子供の心と其生活を徹底せしめて描いたので、玩具絵(おもちゃ絵)の独歩と云う事が出来る。

- ・子供の遊戯には時代の大人の生活が小さく融け込んで表れているから、時代生活の状態を知ることが出来て、それが知的ばかりでなく情的に同感することができる。それに子供は最も新しいものを好むから、其の結果として玩具絵には最も新しい文明現象が表れている。即ち時代生活現在の有様から、新しい時代に転化して動き行く有様を表している。これは玩具絵の没することの出来ない特色で、他の版画の回顧的であつて、既に出来上がった文明の中から描こうとして居るのに対して余程違つている。
- ・玩具絵を見て面白味を感じる所以のものには2つの原因がある。
その一は子供の有する唯一の芸術作品であるということである。子供の享樂を主体としているから、子供の心に伴つて、それに基づいているのである。まず第一に稚気で無邪気で、原始的な気持ちである。第二に人生味に富んでいて他の版画の回顧的なるに比べて、現在の生活を表してしかも樂天的なることである。第三に自然を靈化して死んでいるものでも生かしていることで、家でも舟でも生命あるもののように取り扱つていることである。この自然法の破壊と因果律を超越している点は、兎角我々が理屈っぽく総てに圧迫されているのを思つて、大痛快を感じずには居られない。
その二は他の版画とは違つて、子供が持つものであるから値を安くしなければならないので、色なども成るべく範囲を少なくして、一色で多くの意味を表しているから面白いのである。言い換えれば象徴主義であつて、稚気を帯び古拙な所が面白いのである。
- ・趣味のある玩具絵に依つて教育された江戸っ子は、今日から考えると幸福であつたらうと思う。そして今日の教育が餘に現実的で、所謂科学的打算的であつて、豊富な趣味のある情意的教育が疎かにされているのは、今日の子供に取つて気の毒なことである。
世の中が漸次進歩して種々のものが解放されるに及び、まず社会的の階級が除かれて、次に近頃では婦人問題や子供の開放の叫びを聞く。私の考えるところでは子供を大人から解放することである。そして幼年雑誌や少年雑誌の絵をして、大人を中心とすることを止めて、子供の生活を洞察し子供の享樂の主体としてほしい。そして芳藤の如き大天才が出て、これ等の雑誌に一大革命の起らん事を希望するのである。

●1917年（T6年9月）雑誌「錦絵」へおもちゃ絵に関する論文を投稿

おもちゃ絵とは「子供を享樂の主体とする版画である」と定義し、以下のように体系的に分類している（「浮世絵第4号」掲載の分類が一部変更されている。変更箇所を赤字記載）。

○「おもちゃ絵」の中堅

1. 現相界を描いたもの

(イ) 子供の世界を写し出したもの

「当世子供遊び」なぞいう題での男の児、女の児の色々な遊び。

(ロ) 大人の世界を写し出したもの

「大名行列」「町火消」「祭礼」「台所道具」「お稽古」など。

(ハ) 大人の世界を子供にて表したもの

子供の火消しや大名や山車のお囃しなど。

(ニ) 人間の實生活を動物にて表したもの

「猫のお湯屋」「獸物商人尽し」など。

(ホ) 新興の文明現象を写し出したもの

「汽車」「鉄道馬車」「人力車」、近頃では「飛行機」「自動車」など。

(ヘ) 「何々尽し」と云って同種類のを列挙したもの

「虫づくし」「獸物づくし」「名馬尽し」「樹木尽し」「面尽し」など。

2. 仮相界を描いたもの

(イ) 子供の理想界を表したもの

「武者絵」「相撲絵」「あねさま絵」「役者絵」。

(ロ) 童話を表したもの

桃太郎、カチカチ山、猿蟹合戦など。

(ハ) 芝居を表したもの

役者を皆な子供にしたり、動物で表したりなど。

(ニ) 全然絵師の空想を表したもの

「ほうずき遊び」など。

○第二次的の「おもちゃ絵」

(1) 実用的意味が変じて「おもちゃ絵」となったもの
疱瘡絵など。

(2) 凧絵

凧に模した絵。

(3) 教訓絵

子供に人倫五常を教えようという意味の絵。

(4) それを細工などして楽しむもの

「千代紙」「切組絵」「切組み細工」「切組み燈籠」など。

(5) 絵を応用した玩具

「十六むさし」「目かつら」「福笑い」「双六」「かげ絵」「判じ絵」など。

(6) 俚謡を絵に描いたもの

「ちんわん節」など。

(7) 辻占絵

辻占に出ている絵。

●1917年 (T6年 10月) 浮世絵研究誌「浮世絵第29号」へ論文掲載

師宣寄進の鐘

●1918年 (T7年 2月) 白木屋呉服店での「おもちゃ絵の展覧会」におもちゃ絵を出品

・権田保之助は、大正7年(1918年)2月5日から20日に白木屋呉服店(現在の東急日本橋店)で開催された「おもちゃ絵の展覧会」におもちゃ絵を出品しています。

当時の「おもちゃ絵陳列品目録」によると、巖谷小波、橋田素山、権田保之助の3氏が24点を、三代目いせ辰が80点を陳列しているようです。

・明らかに総括的な意味での「おもちゃ絵」ということばが用いられたのはこの時が初めてで、それ以前は「おもちゃ絵」ではなく、絵草紙、または一枚摺りの名で通用していたようです。

(「おもちゃ絵 江戸庶民のエスプリとデザイン」飯沢匡、広瀬辰五郎 著、徳間書店刊)

●1919年 (T8年 2月) 日本幼稚園協会2月常会でおもちゃ絵に関して講話

・これからお話致そうと思う「おもちゃ絵」の話は、私が5、6年前から自分の趣味として、集め始めたものについて、これに何等かの意味をつけたいという考えから急にやりだしたもので、特別の方針、主義、目的のもとに集めてその結果を発表するというものではありません。

・別室に「おもちゃ絵」を陳列しておきましたが、これはもとより趣味の上から集めたにすぎぬものですから、**大海の一滴にもあたらぬ**のですが、今日は先ず実物を見ていただくを主として、それに付け加えて少しばかりお話したいと思うのであります。

・「おもちゃ絵」は子供がもてあそぶものですから非常に手垢でよごれています。**お目にかけるものの中にも紙の左右の端が手垢がつきボロボロになっているのがあります**。きたないと云う感をお起しになるかもしれませんがそこをよくご理解願いたいと思います。

・私がかつて東京で有名な、おもちゃ絵蒐集の人から見せてもらったものは、玩具を主題とした絵ばかりでありました。しかし、私の考えでは、かかるものは大人が喜んで遊ぶもので、大人の一種の趣味のために存するものであると思う。私の云う「おもちゃ絵」とは、

子供を主としたるもので、おもちゃ絵の享樂の主体が子供にあると云うことである。

・製作の数から云ってもその価値から云っても第一は芳藤で芳藤は実に天才です。彼によって「おもちゃ絵」は大成し、またこの人とともに亡びたのであります。

・素朴なること。子供に合う1つの味としては素朴的と云うことで、全体の構図も色も形も、また、その意味も素朴である。まわりくどい堅苦しいことは棄てて、ただ有りの儘を無邪気にあらわす、これが「おもちゃ絵」のもう1つの味であります。近代文明の中に毎日押し込められている我々はこの絵に接する時、実に一種の自由を感じ、新しさをうれしく思うのであります。

・清新なること。子供は停滞を忌むものです。子供は実に飽きやすく常に新しい刺激を要求して之に同化し共鳴するものであります。彼等には伝説もなく、古めかしい、いやな約束もありません。

そこで「おもちゃ絵」では伝説とか習慣とか云うものを顧慮する必要がなく、飛行機が出来たと云えばすぐに之を絵にする。・・・大人を対象として書いている文展の日本画には未だ飛行機も自動車もあらわれず、相変わらず籠に乗って旅をするところや、牛の車に乗って春の日を櫻狩に出かける人をかいているのを思えば「おもちゃ絵」はこれによってのみ味わい得る一種の鮮新の感がおこるのであります。

・自由なること。子供には一定の型にはまって物事を見ると云うことが出来ないので、有りの儘、正直なもので厭なものは厭ですし、食べたければ遠慮なくその欲を充たすことに熱中し、悲しければ思うままに泣くという風であります。そこで「おもちゃ絵」にもその構図、形、色、題などに実に自由奔放なところがあって古き型に捉われない、

これは四六時中、形にのみ押し込められている我々が見て一種の面白味と軽快なる感をおこす所以であります。

・芳藤は平凡な絵書きで、名を西村藤太郎と呼び、国芳の門下生でありました。初め広く美人画、武者絵などを書いて居りましたが明治維新の十数年前から「おもちゃ絵」を書くようになり、ここに一生面を開いたのであります。その絵は質においても量においても、他の人のととも及ばぬところです。浅草に住み純粹の江戸っ子でした。彼の生活の一面をあらわす逸話が残って居ります。

それはある時、彼は朝湯に出かけ襦袢（どてら）をひっかけて湯から出てくると、獅子舞が太鼓をたたいて行くそのあとから大勢の子供がついて行くのに会いました彼は手拭を肩にかけて、そのまま何処までも之のあとをついて行った。家の人はどうしたことかと不審に思っていると、間の抜けた様な顔をして塵だらけになって、ひょっこり家に帰ってきたと云うことですが、これは彼がいかに子供の心に同感し、子供とともに生活したかを語るものでしょう。実際彼の絵を見ていると子供に対する無限の共鳴同感のあふれているのを感じるのであります。

今日、一人でもかかる絵書きがあればよいと思う。芳藤は難しい教育上の意見、主義は知らなかった。しかも彼は、子供とともに喜び、子供の生活の中に深く生きていこうとする

哲学を知っていた。

彼には児童心理学はなかったが実際体得した同感の心理学があったのです。

(「幼児教育」日本幼稚園協会、大正8年3月1日発行)

- 年代不明、権田保之助が捨てようとしたおもちゃ絵を速雄氏の奥さまが譲り受ける。
 - 1961年(S36)権田保之助が収集したおもちゃ絵は酒井考古堂で買い取っていただく。
 - ・権田保之助が収集したおもちゃ絵は、権田保之助の死後、戦後の混乱期で生活に困り、昭和36年(1961年)に酒井好古堂で買い取っていただいた。
- 昭和36年の速雄氏(権田保之助の次男)の手帳に
- 2/13(月)浮世絵複製を酒井好古堂にて1,000円で売却
- 2/14(火)おもちゃ絵を酒井好古堂に持参。2/16(木)7,500円で売却
- 3/3(金)浮世絵一包(おもちゃ絵含む)を酒井好古堂へ持参。3/4(土)3,500円で売却と記載されている。
- 当時のサラリーマン平均月収が4万円程度で、一部の収集家を除くと、おもちゃ絵は殆ど一般に関心が無かった時代なので、売った枚数は不明だがかなりの額で買い取っていただいたものと考えられる。
- 現在、松本にある日本浮世絵博物館に所蔵されていると伺っている。

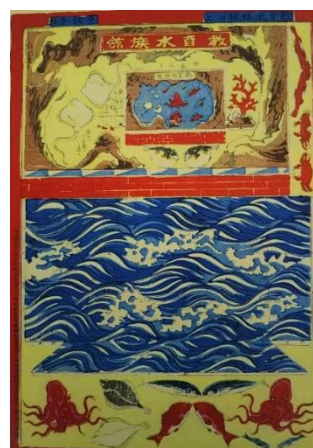
- 2012年(H24)頃権田速雄宅にて、権田保之助が捨てようとしたおもちゃ絵が見つかる。
 - ・権田保之助が捨てようとしていたものを速雄氏の奥さまが譲り受け、その後筆筒の着物の下に保管していた。保管していることをすっかり忘れていたが、平成24年頃に自宅の片付けをしていて偶然に見つかった。
- 明治中期から大正初期に発行された、着せ替え絵、組上絵、千代紙など20数枚あり、半数近くは明治6年から明治政府主導で発行された「教育おもちゃ絵」だ。
- 色鮮やかで、大切に保管されていた様子が伺える。



新案少女きせかへ



流行飛行機の組立て



教育水族館



新ばん千代紙



凧絵尽くし

4. 考察・雑感など

●権田保之助のおもちゃ絵の体系的分類について

権田保之助は、おもちゃ絵の定義を「子供を享樂の主体とする版画である」とし、大正4年9月発行の浮世絵研究誌「浮世絵」投稿の論文にておもちゃ絵を体系的に分類している。

当時はまだ、おもちゃ絵は使って捨てられる安価な子供の玩具だとして文化的価値が見出されず、販売価格も1枚20銭と安価で、日本最初の浮世絵研究誌「浮世絵」を見ても、おもちゃ絵に関する論文は権田保之助以外には見当たらない。

また、日本最古の浮世絵専門店である酒井好古堂HPに「おもちゃ絵を収集し、最初に体系的に分類したのは、権田保之助さんである」と掲載されている。

<http://www.ukiyo-e.co.jp/39943>

これらの事実から、権田保之助はおもちゃ絵を初めて体系的に分類した人物だと考える。権田保之助は、おもちゃ絵を「自目的のもの」と「他目的のもの」とに大きく分類している。「自目的のもの」には「理想界」と「仮想界」があり、男の子の理想界を表したものには武者絵と相撲絵などが、女の子の理想界を表したものには、あねさん絵、役者絵などがある。一方「他目的のもの」には教訓絵、凧絵、疱瘡絵がある。

「浮世絵」への投稿論文の内容から、権田保之助は文化的側面からおもちゃ絵を捉えて体系化し分類したことが伺える。

現在では、おもちゃ絵の文化的価値が認められ、コレクターも多く、オークションでも高値で取引されている。おもちゃ絵に関する展覧会、出版物も多く、絵柄や形態・種類、遊び方というさまざまな観点でおもちゃ絵が分類されているが、未だおもちゃ絵の体系は確立していないように感じる。

(参考) 他の研究者のおもちゃ絵分類

1. 「江戸明治 おもちゃ絵」(上野晴朗 歴史・民俗研究家、1976年)

- ・組上げ、着せ替え、両面合せ、折り替わり、切抜お客遊び、影絵・あやつり人形、替り絵、子供風俗、祭り・年中行事、手遊び、判じ絵・謎づくし、擬人画、語りもの・語呂合せ、子供ばなし、図鑑がわり、単語づくし、凧・面・羽子板、武者絵、戦争絵、芝居絵、すごろく・かるた、千代紙、新聞

2. 「江戸の遊び絵」(国際浮世絵学会常任理事 稲垣進一、1988年)

- ・平面の遊び(絵文字、寄せ絵、上下絵、五頭十体図、一頭多体画、一人三面画、擬人画)
- ・立体の遊び(蛸絵、畳み変わり絵、仕掛絵、両面絵、組上絵、造り物、身振絵、影絵、鳥目絵)
- ・線の遊び(文字絵、釘絵、大津絵、一筆画、ひも絵)
- ・言葉の遊び(金の成る木、判じ絵、地口絵)

3. 「遊べる浮世絵 体験版・江戸文化入門」(国学院大学 藤澤紫、2008年)

- ・戯画、判じ絵、影絵、おもちゃ絵(子持ち絵、絵双六、鞆絵)、文字絵、嵌め絵、地口遊び、見立絵・やつし絵

4. 「おもちゃ絵づくし」(法政大学名誉教授 アン・ヘリング、2019年)

- ・「豆本」おもちゃ絵：豆本、詩歌・わらべ唄・はやり唄
- ・「なぞなぞ」おもちゃ絵：判じ絵・いろは絵
- ・「図鑑」おもちゃ絵：もの尽くし絵
- ・「動物がいっぱい」のおもちゃ絵：擬人絵
- ・「ためになる」おもちゃ絵：絵解き・教訓絵、単語図
- ・細工用のおもちゃ絵：千代紙、着せ替え人形・姉様人形、かつらつけ、香箱
- ・「名場面がジオラマで続々」おもちゃ絵の花形：組上灯籠・組上絵・立版古、回り灯籠
- ・「折って遊ぶ、切り抜いて使う」おもちゃ絵：折り替わり絵、折り形、節句用の絵
- ・双六・ボードゲームとしてのおもちゃ絵：絵双六、絵相撲、絵合わせ、福笑い
- ・その他のおもちゃ絵：凧絵、疱瘡絵、影絵・うつし絵

5. 「酒井好古堂」HP(日本最古の浮世絵専門店 酒井好古堂主人 酒井雁高)

- ・一人で遊ぶもの：姉さま絵、着せ替え、武者絵、相撲絵、羽子板、凧(たこ)絵、子供出し車、子供祭礼、子供大名行列、子供姫様行列、火消出初め、千代紙、両面絵、面絵(めんえ)、影絵、昔はなし(こま絵)、教訓絵、文字あそび、判じ絵、江戸しりとり、はやり唄、〇〇尽くし(図鑑)、組み上げ燈籠絵(芝居舞台、書き割り)
- ・二人以上で遊ぶもの：かるた(骨牌)、双六

●権田保之助が見出したおもちゃ絵の文化的価値について

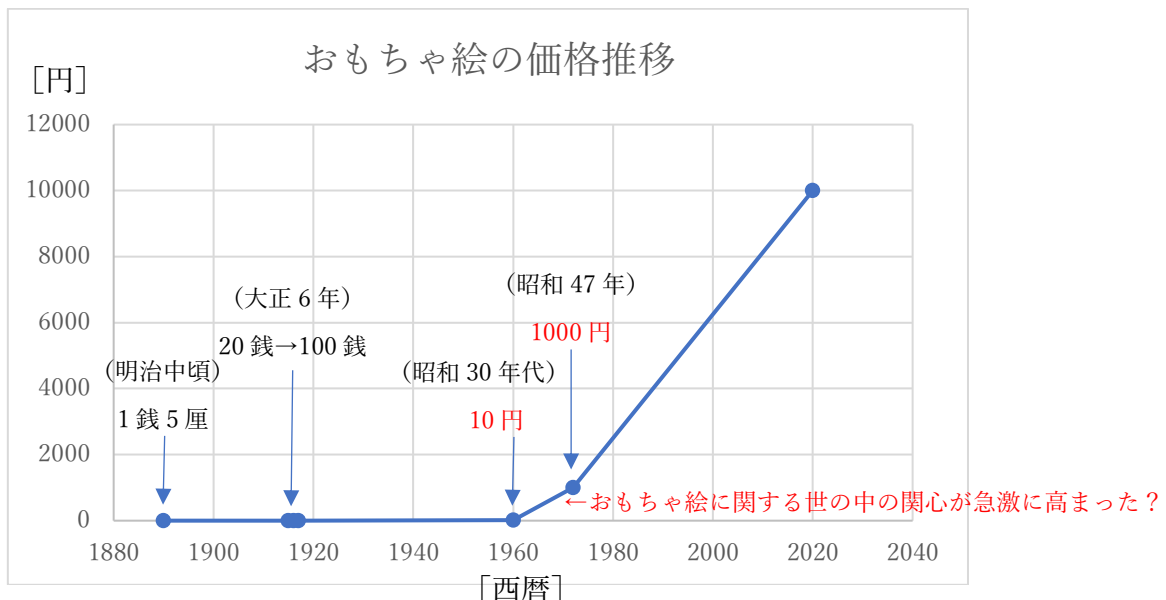
権田保之助は、おもちゃ絵の絵柄からその時代の文化や風習などを知ることができることに加え、「教訓画」から其の時代の教育の方法及び趨勢を知り、「凧絵」から其の時代の人々の心を動かした理想を知り得たり、「子供のみの遊ぶ自目的のおもちゃ絵」から其の時代の生活の縮図を見ることができることなどに、文化的価値を見出したことが分かる。おもちゃ絵の表面的なものだけでなく、その奥に潜む文化を見ようとしたのだろう。

●当時のおもちゃ絵発行年と数について

権田保之助は「錦絵」(大正6年9月刊)にて、「実際におもちゃ絵として世の中に一個の地位を占めるようになりましたのは、先ず安政前後(1850年頃)だと思います。その時分から明治維新頃(1868年)にかけて非常に発達し、維新少し前頃に其の頂点に達したものだと思われます」と書いているが、本稿3ページ掲載のグラフとほぼ一致していることが分かる。このことから、本稿3ページ掲載のグラフは当時のおもちゃ絵発行年と数の傾向を表していると言えるのではないだろうか。

●おもちゃ絵の販売価格の推移について

おもちゃ絵に関する資料を調べていて、おもちゃ絵の販売価格の推移が見えてきた。



以下の資料を元に西島が作成したグラフ

- ・明治中頃(1890年頃)の相場、1枚1銭5厘
- ・大正4年(1915年)、1枚20銭(「落穂ひろい」(瀬田貞二))
- ・大正4年(1915年)6月15日当時、しるこ代が一杯2銭か3銭として、10回貯めると20銭でおもちゃ絵が1枚買えた。

(「おもちゃ絵 江戸庶民のエスプリとデザイン」(飯沢匡、広瀬辰五郎))

- ・大正6年(1917年)2月12日、入札ならびに開札した錦絵売立てが東両国の東京美術倶楽部で札元温古堂、丁字堂などで催されたなかに、広重の金沢夜景三枚続きが105円とある。それが、同一の浮世絵師でも、おもちゃ絵となると20銭(推定)である。

(「おもちゃ絵 江戸庶民のエスプリとデザイン」(飯沢匡、広瀬辰五郎))

- ・近頃(大正6年9月頃)ある懇意な錦絵屋さんで一寸値段を聞いて見ましたところが、余り値が違うので「算盤の桁が違うのじゃありませんか」と申しますと、「いいえ、決して。これでも貴君だから奮発して置いたのです」と云われて少々呆れました。

(権田保之助「錦絵」(大正6年9月刊))

*浮世絵研究誌「浮世絵」が大正4年に創刊されたことで、浮世絵やおもちゃ絵の認知度が高まり、大正7年2月に白木屋で「おもちゃ絵展」が開催されたことから、大正6年頃からおもちゃ絵の値段が上がってきたものと推察する。

- ・明治後期は露店で多数のおもちゃ絵が1枚数十銭で売られていたようですが、大正6年頃になると浮世絵や錦絵が流行して研究や収集する人も多くなりつつあり、おもちゃ絵も一桁値段が上がったようです。

(錦絵第5号「7月の日誌より」、錦絵第6号「おもちゃ絵に就いて」権田保之助)

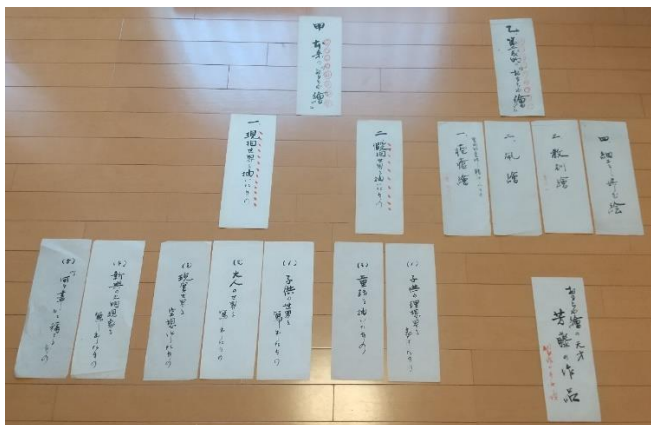
- ・昭和30年代(1955~1964年頃)は、おもちゃ絵は「ゲテな子どもだましの、くだらない」錦絵として注目する人が多くなく、44枚の江戸時代のおもちゃ絵や80余枚の抜き芝居絵など束ねたものが1枚当たり10円程度の単価で売られていた。

(「落穂ひろい」瀬田貞二)

- ・1972年、1枚1000円を超える。(「落穂ひろい」瀬田貞二)
- ・現在、1枚数万円。

●権田保之助が保有していたおもちゃ絵の枚数について

- ・権田保之助がおもちゃ絵を仕切っていた紙、おもちゃ絵を保管していたと思われる箱が今でも残っている。



おもちゃ絵を分類する仕切り紙の中に「おもちゃ絵の天才 芳藤の作品」という仕切り紙がある。芳藤(よし藤)の作品を分けて保管していたのだろう。



箱の寸法は、縦 38 cm、横 56 cm、高さ 8 cm（内径 7.5 cm）で、おもちゃ絵を 2 枚横に並べて入れられる。

500 枚程度の紙を重ねて入れられる高さだが、おもちゃ絵とおもちゃ絵の間に保護紙を入れたと考えられるため、半数の 250～300 枚程度（2 枚を横に並べた場合は 500～600 枚程度）のおもちゃ絵を保管できたと推察する。



雑誌「錦絵」掲載の復刻版浮世絵が保管されている。

- ・昭和 36 年に酒井好古堂にて、おもちゃ絵を 7,500 円で売却、浮世絵一包（おもちゃ絵含む）を 3,500 円で売却したと速雄氏の手帳に記録がある。
- ・昭和 30 年代のおもちゃ絵の相場は 1 枚 10 円程度なので、単純に計算して 750 枚以上おもちゃ絵を売却したと推察される（ $7,500 \text{ 円} \div 10 \text{ 円} = 750 \text{ 枚}$ ）。
- ・おもちゃ絵に関する世の中の関心が高まってきている状況、人気のよし藤のおもちゃ絵が纏まったコレクションであることから、かなり奮発して買い取ってくれたものと推察する（300～400 枚のおもちゃ絵を相場の倍の値段で買い取ってくれたのかも知れない）。

[今後について]

- ・分類ありきで考えるとそうかなと思ってしまうが、実物のおもちゃ絵を目の当たりにした時にどう考えるか体験することで権田保之助の追体験ができ、権田保之助の体系的な分類について理解が深まるように思う。機会を捉えてぜひチャレンジしてみたい。

[参考資料]

- ・浮世絵研究誌「浮世絵」全巻（酒井庄吉、浮世絵社、大正4年6月～9年9月）
- ・書画骨董雑誌「玩具絵の話」（大正5年6月）
- ・雑誌「錦絵」（大正6年9月）
- ・「幼児教育」（日本幼稚園協会、大正8年3月1日発行）
- ・酒井好古堂 HP
- ・書籍「おもちゃ絵 江戸庶民のエスプリとデザイン」（飯沢匡、広瀬辰五郎、徳間書店）
- ・書籍「よし藤 子ども浮世絵」（中村光夫、富士出版）
- ・書籍「落穂ひろい 日本の子どもの文化をめぐる人びと」（瀬田貞二、福音館書店）
- ・書籍「江戸の遊び絵」（稲垣進一、東京書籍）
- ・書籍「江戸明治 おもちゃ絵」（上野晴朗、アドファイズ東京文庫）
- ・書籍「遊べる浮世絵 体験版・江戸文化入門」（藤澤紫、東京書籍）
- ・他 おもちゃ絵に関するカタログ類など

以 上